



# 宮崎大学学術情報リポジトリ

## University of Miyazaki Academic Repository

連携型小中一貫教育実践における学力向上の取り組み：宮崎県えびの市での質問紙調査から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 宮崎大学教育文化学部 公開日: 2013-10-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 遠藤, 宏美, 助川, 晃洋 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10458/4611">http://hdl.handle.net/10458/4611</a>

# 連携型小中一貫教育実践における学力向上の取り組み －宮崎県えびの市での質問紙調査から－

遠藤 宏美・助川 晃洋

## Measures to Improve Students' Academic Competence in Combined Education in Elementary and Junior High Schools: A Questionnaire in Ebino City, Miyazaki Prefecture

Hiromi ENDO and Akihiro SUKEGAWA

### I はじめに

2000（平成12）年4月1日に通称「地方分権一括法」（正式名称は、「地方分権の推進を図るための関係法律の整備等に関する法律」）が施行されたこと等を契機として、教育行政においても、国レベルでの権限が、一定程度まで都道府県レベル、さらには市区町村レベルへと委譲されるといった分権改革が実現し、実際に独自の仕方で教育改革に着手し始める地方自治体が、全国各地に登場するようになった。その意味では、近年の教育改革動向を把握するためには、国の教育政策や文部科学省に端を発する垂直的な教育行政ルートの影響力は、依然として大きいにしても、同時に、各自治体における多様な改革への動きや模索、そして国の政策が、各自治体においてどのように具現化されているのかに目配りすることが、いまや不可欠になっていると言ってよい。このような考えに基づくならば、地域教育改革の試みとしての小中一貫教育について、児童・生徒の学力向上という国家的な重点課題－それは同時に、地域の切実な課題でもある－への対応という観点から検討することには、妥当性が認められるはずである。もちろん、そうした研究を遂行するには、特定の地域に着目することが必要である。本研究では、それを宮崎県えびの市に求める。

えびの市は、県南西部、鹿児島県と熊本県との境界に位置し、霧島山やえびの高原を域内に含む。2013（平成25）年3月1日時点での人口は20,613人、前月比155人減である。2010（平成22）年12月にえびの市教育委員会から出された「えびの市一貫教育推進基本計画」（以下、「基本計画」と略記する）によれば、児童・生徒数もまた、「平成元年、小学生2,165人、中学生1,100人であったが、平成22年には、小学生1,016人（53%減）、中学生551人（50%減）に減少している」<sup>(1)</sup>。そしてえびの市では、2008（平成20）年度から、飯野地区（市立飯野小学校、市立飯野中学校、県立飯野高等学校）において小中高一貫教育を先行実施し、さらに2009（平成21）年度から、市内すべての中学校区において、小中一貫教育を実施している。「基本計画」によれば、「えびの市（連携型）一貫教育」の「目的」は、次の通りである<sup>(2)</sup>。

小中の9年間、小中高の12年間の期間の中で、児童生徒の発達段階に応じた「系統性・

一貫性」のある指導を行い、徹底した学力向上と地域に貢献する人材の育成を目指す。

このように、えびの市の小中一貫教育は、児童・生徒の「徹底した学力向上」を一つの、しかも第一の目的としている。では「基本計画」は、そのための具体策として、どのような方法を提案・推奨しているのか。実は、この問いに対する回答とみなし得る記述は、そこからは全く見出すことができない。「方向性」が、次のように示されているだけである<sup>(3)</sup>。

少ない児童生徒数で、(中略)学力向上を図るために、学校や地域の実態等を考慮しながら、現在の連携型一貫教育に限らず、併設型一貫教育や施設一体型一貫教育を取り入れ、小中一貫教育の推進を図る。

しかし児童・生徒の学力向上をめざした実践の事実は、各学校、あるいは各中学校区において、すでに相当程度蓄積されているはずである。このように考えて筆者(遠藤・助川)は、えびの市の連携型小中一貫教育実践における学力向上の取り組みについて、現状(今日的達成)を把握するために、市内全小・中学校を対象とした質問紙調査を実施した。本研究は、校種別と中学校区別に、その結果を報告し、考察を加えるものである。

なお筆者は、宮崎県小林市において同様の調査を実施し、すでに拙稿<sup>(4)</sup>を発表している。これと重複する記載内容は、本研究では、あえて簡略化した。あらかじめお断りするとともに、あわせての参照をお願いしたい。

## II 研究の目的と方法

連携型小中一貫教育の立場から、えびの市では学力向上を目指してどのような取り組みがなされているのかを把握するべく、以下の6点を中心とした質問紙調査を行った。なお、調査票は上記の小林市調査で用いたものとはほぼ同じである。ここで「ほぼ」と表現したのは、調査の対象地域や実施時期の違いを踏まえて、質問紙に最低限の文言の修正を施したためである。したがって、調査票の構成やそれぞれの質問の意図については、上記拙稿を参照願いたい。

- 1) 自校および中学校区の児童・生徒全体の学力や学習に関する状況を、学校としてどのように認識しているか。
- 2) 各学校の重点目標は何か。また、「知育」、「徳育」、「体育」のうち、最も課題としていることは何か。
- 3) 児童・生徒の学習支援や学力向上に向けて、どのような取り組みを取り入れているか。
- 4) 小中連携を活かしてどのような学習支援・学力向上に向けた取り組みを行っているか。
- 5) 小中一貫教育の仕組みを活かして学力向上に取り組む際、困難を感じていることは何か。
- 6) 学校の教育活動や小中一貫教育に対して、保護者や地域住民から理解や協力を得られているか。

調査の概要は、以下の通りである。調査の実施についてはえびの市教育委員会の全面的な協力を得て行われたことを付記し、感謝を表したい。

\*調査対象(調査票配布対象):えびの市立小学校(全5校、分校は本校に含む)、えびの市立中学校(全4校)の計9校

\*回答者:学校の運営や小中一貫教育に深く携わっている教員(校長、教頭、教務主任等を想定)。中学校区での取り組みに関して回答を求めた質問に対しては、同一中学校区の他校と相談したり回答を統一したりする必要はないことを申し添えた。

- \*有効回答数：9校（有効回答率：100%）。  
回答した調査票に加え、可能であれば学校の概要や教育実践について記した資料等を同封しての返送を依頼したところ、5校から学校経営案や研究紀要の送付があった。
- \*調査の方法：学校宛てに調査票を直接郵送し、同封した返送用封筒にて返送を依頼した。自由記述欄が多いため、ワープロを利用した回答を可能にした。その場合には、調査票のファイルをメールに添付して学校宛てに送信し、それに記入した回答を返信してもらうよう依頼した（この方法を利用した学校は2校）。
- \*調査の期間：平成25年2月下旬から3月中旬

調査対象校の基本属性は、以下の通りである。

①学校数

小学校 … 5校  
中学校 … 4校

②中学校区の構成

小学校1校と中学校1校の組み合わせ … 3中学校区  
小学校2校と中学校1校の組み合わせ … 1中学校区

③学校規模（特別支援学級を除いた学級数、分校を除く）

小学校 6学級（1学年1学級）未満 … 1校  
6学級以上12学級未満 … 2校  
12学級（1学年2学級）以上 … 2校  
中学校 3学級（1学年1学級）以上6学級未満 … 2校  
6学級（1学年2学級）以上 … 2校

### Ⅲ 結果と考察（1）－校種別－

対象校が9校と少ないことから、今回の調査の結果に対して統計学的な解析は施していない。しかし、小学校全体と中学校全体の数値を示すことにより、市全体としてどのような取り組みがなされているのか、校種による違いがあるのかなどを把握することが可能になると考える。そこで以下ではまず、単純集計結果の中から特徴的な回答をピックアップし、えびの市の小中一貫教育の現状と課題を探っていく。なお、もともとの対象校数が少ないことに加え、校種別に比較すればなおさら、1校あたりの回答が持つ割合が大きくなるため、結果の解釈は慎重に行う必要がある。本稿では、結果を把握しやすくするために回答の割合をパーセンテージで示すとともに、回答があった学校数を付記することとした。

用いたデータはその都度提示するが、考察のもととなった資料1「調査票および単純集計結果（校種別）」も適宜、参照願いたい。

#### （1）学力・学習状況に対する認識

図1は、自校の児童・生徒の学力の状況についての認識である。学校全体として見た場合、全国平均と比べてどのような状態にあるかを尋ねている。その結果、小学校では「全国平均並



み」(75.0%、3校)もしくは「やや下回る」(25.0%、1校)という回答であった。中学校では「やや下回る」が50.0%(2校)と増えた一方、「やや上回る」も増加し、小学校に比べて生徒の学力分布に広がりが見て取れる。

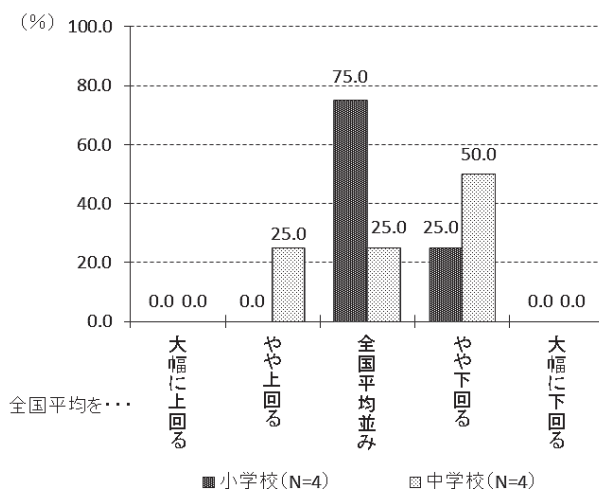


図1 自校の児童・生徒の学力の状況(校種別、単位:%)

図2は、中学校区として、児童・生徒全体の学力の状況に対する認識を尋ねた結果である。それぞれの回答の割合に違いがあることについて、安易な解釈ができないことを先に断っておきたい。なぜなら、小学校と中学校との間で児童・生徒の学力の状況についての基準や認識が異なっていることに加え、「中学校区として」の回答を求めているものの、各学校が「自校の児童・生徒の状況」について回答しているおそれもあるためである。そのことを踏まえつつ回答結果を見てみると、「学力が高い者と低い者との差が大きい」について、小学校・中学校ともに「とてもよくあてはまる」と「ややあてはまる」が全体を占め、その割合もほぼ一致している。このことから、中学校区の児童・生徒の学力に差が大きいと認識している学校が多いことがわかる。

小学校で「学力が高い児童・生徒が多い」に20.0%(1校)が「まったくあてはまらない」と回答し、反対に「学力が低い児童・生徒が多い」についても20.0%(1校)が「とてもよくあてはまる」と回答している。さらに「全体として学力水準が低い」についても20.0%(1校)が「とてもよくあてはまる」と回答しており、児童・生徒全体の学力水準の低さに明確な認識を持っている小学校があることがわかる。

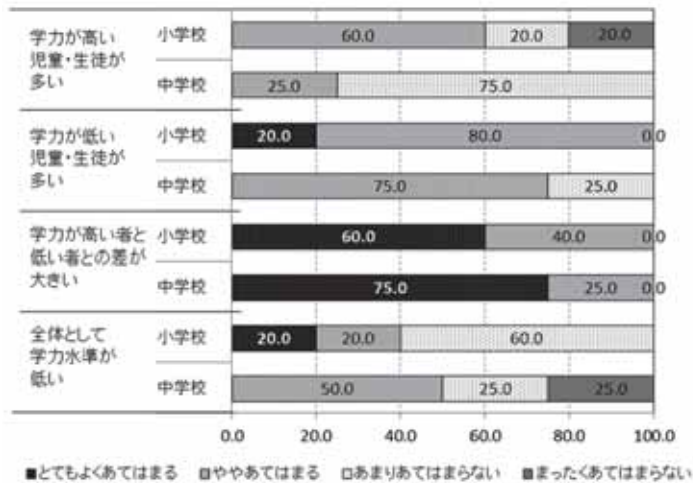


図2 中学校区の児童・生徒の学力の状況（校種別、単位：％）

具体的に、児童・生徒の学習に関してどのような特徴や困難があるかを尋ねたところ（図3）、小学校と中学校との結果に大きな違いは見られない。その中でも注目したいのは、家庭学習への取り組みとその成果が窺える、次の2つの質問とそれに対する回答である。「家庭学習に積極的に取り組む児童・生徒が多い」に「ややあてはまる」と回答した割合が、小学校では20.0%（1校）、中学校では50.0%（2校）と決して多いとはいえない。「学習習慣が身についていない児童・生徒が多い」ことについては、小学校の60.0%（3校）が「ややあてはまる」と回答したのに対し、中学校では「とてもよくあてはまる」と「ややあてはまる」が25.0%（1校）ずつあり、認識が強まっている。このことから、児童・生徒の家庭学習への取り組みの消極的な態度と、おそらくその結果として学習習慣が身についていない児童・生徒の多さが窺える。

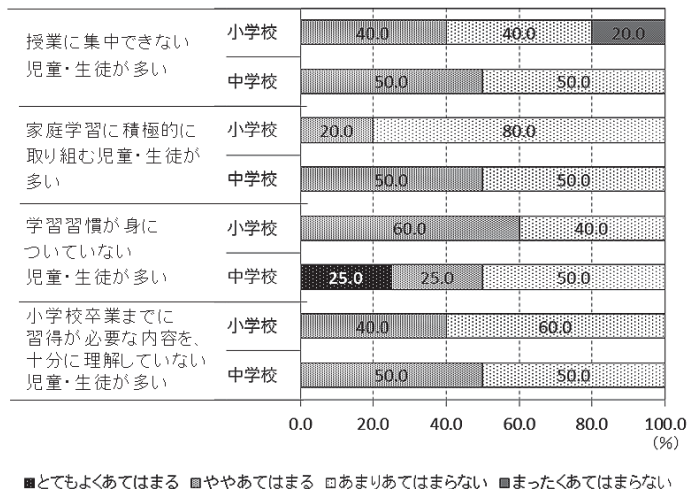


図3 中学校区の児童・生徒の学習に関する困難（校種別、単位：％）

## (2) 重点目標

自校が教育活動を行う上で重点を置いていることを、3つまでの複数回答で尋ねた結果が図4である。小学校・中学校ともに最も多かった回答は、「基本的な生活習慣を身につけさせること」(75.0%、各3校)であり、生活習慣の定着を重要視している学校が多いことを押さえておきたい。次に多かった回答は、小学校では「学校全体としての学力水準を上げること」(75.0%、3校)、中学校では「すべての児童・生徒に、基礎学力を身につけさせること」(75.0%、3校)である。先の図1から見て取れるように、すべての小学校が「全国平均並み」あるいは「やや下回る」学力水準であったことから、「学校全体としての学力水準を上げること」を目標とする学校が多いことは当然の結果といえよう。また、中学校では全国平均の学力を「やや下回る」学校が半数に及んだことから、「すべての児童・生徒に、基礎学力を身につけさせること」を重点目標とすることも理解できよう。

また、小・中学校の50.0% (各2校) が「郷土を愛し、地域に誇りが持てる児童・生徒を育むこと」を選んだことは、えびの市の特徴といえよう。えびの市は、2008 (平成20) 年度より「総合的な学習の時間」を利用した地域学「えびの学」を設け、市内小・中学校および市内に位置する県立飯野高等学校で授業を行っている。「基本計画」に示された「えびの市学校教育の基本方針」のうち、「えびの市学校教育五つの挑戦」の1つ目に「ふるさと教育・キャリア教育への挑戦」<sup>(5)</sup> が掲げられていることから、えびの市が地域を活用し、ふるさとを愛する心や態度を養う学習に力を入れていることがわかる。そしてその学習を通じて、「自分に自信と誇りが持てる子どもの育成を目指し」<sup>(6)</sup> てもいる。図4において、「自分に自信や誇りを持てる児童・生徒を育成すること」に小・中学校それぞれ25.0% (各1校) の回答があることから、地域学習との関連が推察できる。

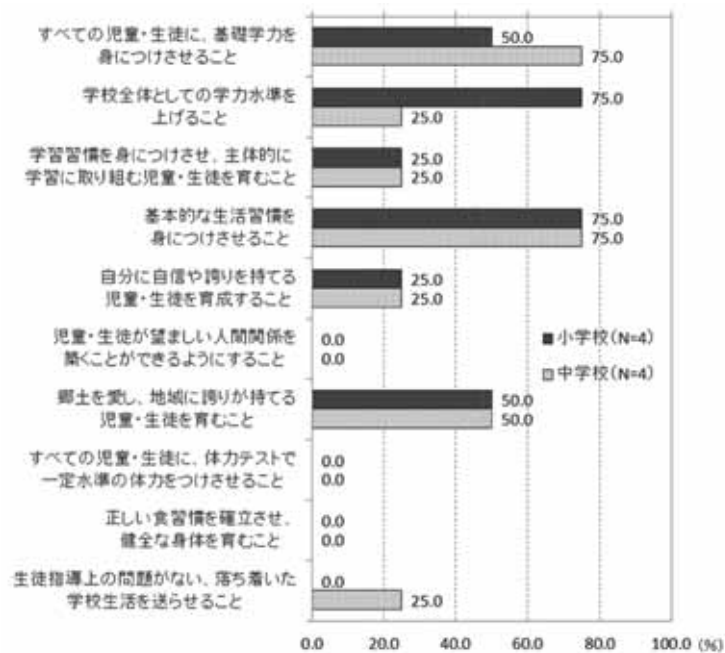


図4 教育活動における重点目標 (3つまでの複数回答、校種別、単位: %)

### (3) 学力向上に向けた取り組み

学力向上に向けた具体的な取り組みについて尋ねた結果が図5である(「とても積極的」あるいは「やや積極的」という実施の程度とともに、「実施していない」割合も示した)。

この結果によると、「習熟度別指導」、「少人数指導・少人数学習」<sup>(7)</sup>、「学力が高い児童・生徒に対して、発展的な学習の機会を用意すること」については、程度はともあれ小・中学校ともにすべての学校が積極的に実施しており、児童・生徒の習熟度に配慮した指導に力を入れていることが窺える。補足しておく、小学校では主に3年生以上の算数に、中学校では数学(と英語)に習熟度別指導を取り入れている。このことから、特に算数・数学は習熟度に関心がでやすい教科と考えられ、より早い段階からその改善に取り組んでいるといえる。さらに、「家庭学習の習慣を身につけさせる指導」もすべての小・中学校において、程度の差はあるが積極的に取り組んでいることが見て取れる。

中学校ではさらに、「放課後や休み時間等の補習指導」や「長期休業中の補習指導」に積極的に取り組んでいる学校が多い。これらの補習指導は、小学校では実施していないか、実施していてもあまり積極的には行っていないものである。中学校においては補習指導の重要性がより高いと考えられる。

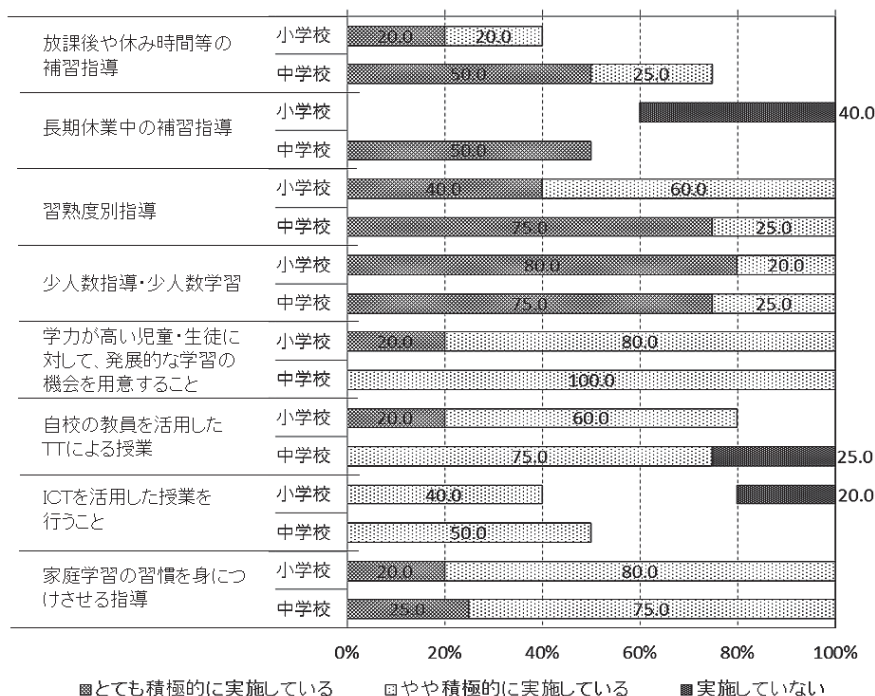


図5 学力向上に向けた取り組み(校種別、単位:%)

### (4) 小中連携を活かした学習支援・学力向上に向けた取り組み

小・中学校が連携して、どのような児童・生徒の学習支援・学力向上を目指した教育活動を行っているのだろうか。表1は、小中連携を活かした取り組みの実施率を示したものである。

なお、全体的に見ると小学校と中学校とでは回答の割合に大きな差が見られないため、中学校区としての実情がほぼ反映された結果であると考えてよいだろう。

### ①教員どうしの連携

「小・中学校間で教員が相互に授業を参観すること」、「中学校区の教員が合同で、児童・生徒の学力についての分析を行うこと」、「中学校区で児童・生徒の学習指導・教科指導について、合同で研修を行うこと」、「小・中学校合同で、系統性・一貫性の視点からカリキュラムを検討すること」について、すべての小・中学校が実施していると回答していることから、えびの市の小・中学校では児童・生徒の学習に関する教員どうしの連携が進んでいると見ることができるといえる。なお、えびの市教育委員会では、「えびの市一貫教育を充実させ、スムーズな推進を図るために」<sup>(8)</sup>、教育課程の編成の進め方や（全教科ではないものの）指導方法や学習指導案、教材例などをまとめた「えびの市一貫教育 推進の手引き」（以下、「手引き」と略記する）を上・下巻にわたって作成し、教員どうしの連携を支えている。

しかし「小・中学校合同で、評価規準や方法について一貫性の視点から検討すること」は全体で33.3%と低い水準にとどまっている。

### ②「乗り入れ指導」

他校種の教員が授業を行う「乗り入れ指導」については、「単独で」（全体：88.9%）、「TTとして」（全体：77.8%）とも実施率が高い。しかし、教育活動を行うに際して「中学校区で、小・中学校間の校時程の調整を図ること」を実施している学校はわずかであった（小：20.0%（1校）、中：25.0%（1校））。なお、これらの2校は同じ中学校区に属する。

図表の提示は省略するが、別の質問に対する回答の結果から「乗り入れ指導」の学年・教科や頻度などを補足しておく、中学校の教員が小学校で指導するのは、ほとんどが5・6年生の音楽と英会話であり、週1回コンスタントに行われているようである。そのほかに、時間数は減るものの、1・2年生の英会話や6年生の国語、社会、算数、理科などでも「乗り入れ指導」が行われている。逆に、小学校の教員が中学校で指導することについては具体的な記述がなく、詳細は不明である。

### ③指導の一貫性や系統性

「中学校区で共通の『家庭学習の手引き』を作成するなどして、家庭学習の指導を統一したり系統性を図ったりすること」は全体で88.9%、「家庭学習のあり方に一貫性が持てるよう、小・中学校間で調整すること」は全体で77.8%と、家庭学習に関しても小中連携を活かして積極的に取り組んでいる様子が窺える。また、「授業時の態度や学習の決まりについて、中学校区で統一したり系統性を図ったりすること」も全体で88.9%と高く、さらに、学習環境を支えるための「校則や学校生活の決まりについて、中学校区で統一したり系統性を図ったりすること」も、全体で66.7%と決して低くはない。家庭学習も含めた学習指導のあり方の一貫性や系統性の検討や指導が進んでいると推察される。

しかし、「学習や生活に関する家庭向けの通信を、中学校区として発行すること」は全体で33.3%と低い。



表1 小中連携を活かした学力向上・学習支援に向けた取り組みの実施率（全体、校種別、単位：％）

小中連携を活かした学力向上・学習支援に向けた取り組み	全体	小学校 (N=5)	中学校 (N=4)
小・中学校間で教員が相互に授業を参観すること	100.0	100.0	100.0
中学校区の教員が合同で、児童・生徒の学力についての分析を行うこと	100.0	100.0	100.0
中学校区で児童・生徒の学習指導・教科指導について、合同で研修を行うこと	100.0	100.0	100.0
小・中学校合同で、系統性・一貫性の視点からカリキュラムを検討すること	100.0	100.0	100.0
他校種の教員が単独で、授業を行うこと	88.9	100.0	75.0
中学校区で共通の「家庭学習の手引き」を作成するなどして、家庭学習の指導を統一したり系統性を図ったりすること	88.9	100.0	75.0
授業時の態度や学習の決まりについて、中学校区で統一したり系統性を図ったりすること	88.9	80.0	100.0
他校種の教員がTTとして、授業に入ること	77.8	80.0	75.0
家庭学習のあり方に一貫性が持てるよう、小・中学校間で調整すること	77.8	80.0	75.0
校則や学校生活の決まりについて、中学校区で統一したり系統性を図ったりすること	66.7	60.0	75.0
通常の授業以外で他校種の教員が授業を行うこと	44.4	40.0	50.0
小・中学校合同で、評価規準や方法について一貫性の視点から検討すること	33.3	40.0	25.0
学習や生活に関する家庭向けの通信を、中学校区として発行すること	33.3	40.0	25.0
学力面で気になる児童・生徒を特定して、小・中学校合同で支援に当たること	22.2	20.0	25.0
中学校区で、小・中学校間の校時程の調整を図ること	22.2	20.0	25.0

### （5）小中一貫教育に取り組む中で感じる困難

図6は、小中一貫教育の仕組みを活かして教育活動に取り組む中で感じる困難について、校種別に示したものである。

小・中学校ともに「感じている」（「かなり感じている」と「少し感じている」の合計）割合が高いのは、「小・中学校の教員が持つ、それぞれの指導観や子ども観を理解するのに時間がかかること」（小：80.0%、中：75.0%）、「小・中学校間で、指導方法や学習の進め方などが異なること」（小：60.0%、中：50.0%）、「小・中学校間で、評価の考え方や方法が異なること」（小：60.0%、中：50.0%）であった。すなわち、小中一貫教育を行う上で感じる困難は、小学校と中学校との間でさまざまな考え方や指導方法などが「異なること」と、それらへの理解の難しさということである。えびの市では教員どうしの連携は進んでおり、小中一貫教育を推進するうえでの「手引き」も存在する。しかし、それらだけでは解決できない「壁」があるものと思われる。

また、「小学校と中学校との距離が離れていて、行き来に時間がかかること」について、小学校では20.0%（1校）、中学校で50.0%（2校）が「少し感じている」と回答しているが、さほ

ど多いとはいえない。このことから、小学校と中学校との間の「壁」は、物理的な距離やそれに伴う時間の問題ではなさそうである。一方、「小・中学校の教員が集まって話し合う時間が確保しにくいこと」について、小学校で「かなり感じている」(20.0%、1校)と「少し感じている」(20.0%、1校)という回答であったことに比べ、中学校はすべての学校で「あまり感じている」と回答しており、困難の感じ方にギャップがある。このことは、自分の担当する教科の授業がない時間に、話し合いの時間を適宜持つことが可能な中学校教員と、児童が下校するまで話し合いの時間を確保することが難しい小学校教員という違いが、その一因として考えられる。

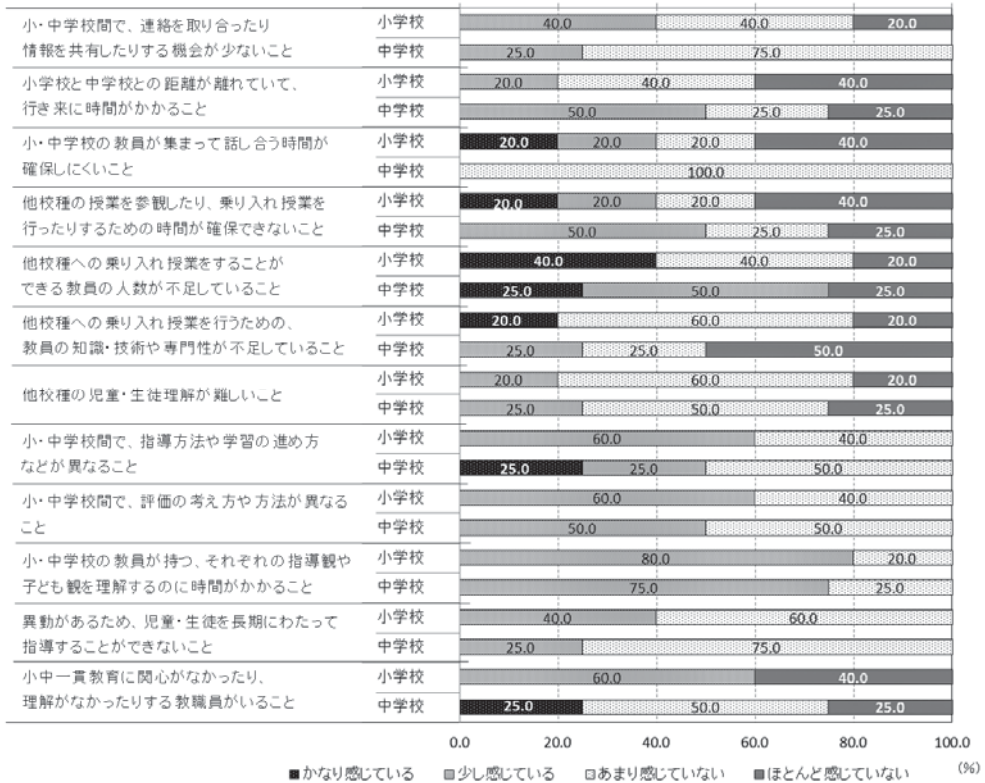


図6 小中一貫教育に取り組む中で感じる困難（校種別、単位：%）

### (6) 学校や教育に対する保護者の理解や協力

えびの市の小・中学校では、家庭学習の指導を統一したり系統性を図ったりすることや、家庭学習の習慣を身につけさせる指導を積極的に行うなど、家庭学習に対する指導に力を入れているようである。

では、家庭学習に対する保護者の理解や協力はどのくらい得られているのであろうか。図7は学校や教育に対する保護者の理解や協力の状況を尋ねた結果である。まず、小学校の80.0%（4校）、中学校のすべて（4校）が、「学校の教育活動や行事等に協力する保護者」が「多いと思う」（「かなり多いと思う」+「やや多いと思う」の合計）と回答しており、学校が行う教育



活動に対して保護者からの惜しまぬ協力が得られている様子が窺える。また、「小中一貫教育に対して理解のある保護者」も小学校の80.0%（4校）、中学校の75.0%（3校）が「多いと思う」と回答し、えびの市が進める小中一貫教育に対する理解もおおむね得られていると考えてよいであろう。しかし、「児童・生徒の家庭学習に協力する保護者」が「多いと思う」学校は、小学校で20.0%（1校）、中学校で50.0%（2校）にとどまり、逆に小学校では80.0%（4校）が「あまり多くないと思う」と回答している。このことから、家庭学習に対しては保護者の協力が十分に得られているとはいえないようである。

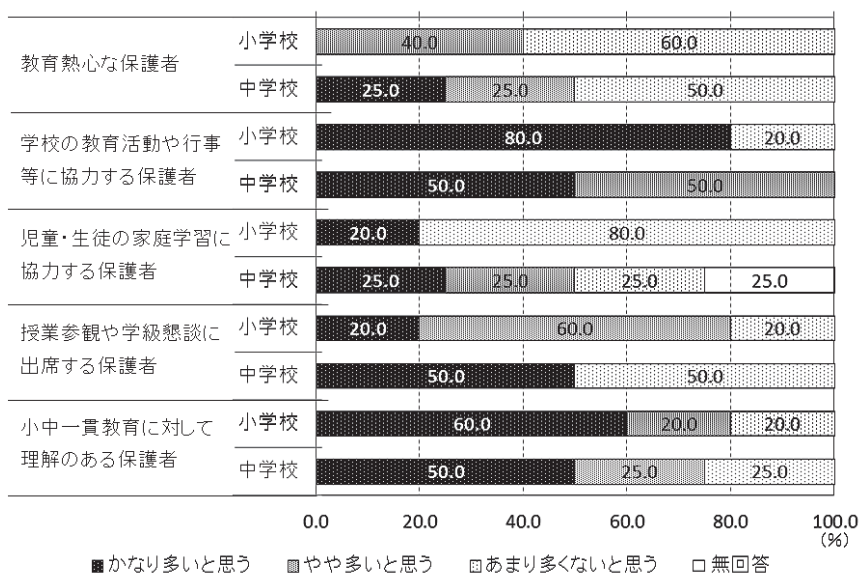


図7 保護者・地域住民の、学校や教育に対する理解や協力（校種別、単位：%）

#### IV 結果と考察（2）-中学校区別-

児童・生徒の学力の実態をどのように捉え、そこから課題と推測されることに対して小学校と中学校とが連携してどのように取り組んでいるのかを、中学校区別に概観する。用いるデータは、今回の質問紙調査の結果（資料2「回答一覧」および資料3「自由記述一覧」）に加え、児童・生徒数や教職員数、学校の位置関係などの公表されている基本情報である。

以下の記述では、学校名は匿名とし、中学校については大文字のアルファベットで、小学校については対応する小文字のアルファベットで表記する<sup>(9)</sup>。1つの中学校区に複数の小学校がある場合には、アルファベットと数字を組み合わせることで区別することとする。

##### (1) J中学校区

J中学校区は、J中学校とj小学校とからなる、いわゆる「1小・1中」の組み合わせである。J中とj小との距離は約650mである。

児童・生徒の学力は、J中が「全国平均をやや下回る」と回答しているが、小学校段階での

児童の学力はj小が無回答のため不明である。しかし、中学校区としての学力の状況を見ると、「学力が高い児童・生徒が多い」と「学習意欲が高い児童・生徒が多い」に、j小は「ややあてはまる」、J中は「あまりあてはまらない」と回答していることから、学力や学習意欲は小学校段階ではやや高く、中学校段階ではやや低いようである。このことはJ中が、「当該学年の学習についていけない児童・生徒」や「小学校までの学習内容を習得していない生徒」が「やや多い」と回答していることから窺える。さらに、「授業に集中できない児童・生徒が多い」や「学習習慣が身につけていない児童・生徒が多い」に、j小は「あまりあてはまらない」と回答しているのに対し、J中は「ややあてはまる」としている。これらの回答が、中学校区としてではなくそれぞれの学校の実情を反映しているものであるとするならば、小学校から中学校に進学する前後に、学習習慣が身につけていなかったり意欲的に学習に取り組めなかったりする生徒が増え、そうでない生徒との差が生じているおそれがありそうである。

この原因と課題には、2つのことが考えられる。1点目は、J中学校が「教育活動を行う上で重点を置いていること」のひとつに「生徒指導上の問題がない、落ち着いた学校生活を送らせること」と回答していることに加え、「授業中落ち着きのない児童・生徒」も「やや多い」と回答していることから、J中学校では（あるいは中学校区として）落ち着いた授業を展開しにくい様子が窺える。

もう1点は、児童・生徒の学習に対する保護者の理解と協力が十分には得られていないことである。「学校の教育活動や行事等」に協力する保護者は、j小（「かなり多いと思う」）、J中（「やや多いと思う」）ともに多くいるようであるが、「児童・生徒の家庭学習に協力する保護者」は両校とも「あまり多くないと思う」と回答し、家庭学習への協力が得られていない児童・生徒の多さが窺える。また、「教育熱心な保護者」や「授業参観や学級懇談に出席する保護者」が、j小では「やや多いと思う」のに対し、J中では「あまり多くないと思う」との回答であり、中学校段階で教育への関心が低くなっている。その背景には、J中学校区では「経済的に困難を抱えている家庭の児童・生徒」が「やや多い」（両校とも）ことがあると考えられる。

J中学校区は、他の中学校区に先駆けて小中一貫教育に取り組んできた。そのため、たとえば「学力面で気になる児童・生徒を特定して、小・中学校合同で支援に当たること」をはじめとした、学校間で連携することによる児童・生徒へのサポート体制が他の地区よりも整っている。しかし一方で、他校種への乗り入れ授業をするための教員の人数や知識・技術等の不足についての感じ方（j小「ほとんど感じていない」、J中「少し感じている」）や他校種の児童・生徒理解の難しさ（j小「あまり感じていない」、J中「少し感じている」）、評価の考え方や学習の進め方の違い（j小「あまり感じていない」、J中「かなり感じている」）など、2校間で認識にギャップが見られる。さらに、「小中一貫教育に関心がなかったり、理解がなかったりする教職員がいること」も、j小では「ほとんど感じていない」が、J中は「かなり感じている」と、学校内でも教職員間の意識に差がありそうである。

## （2）K中学校区

K中学校区は、K中学校とk小学校の「1小・1中」の組み合わせである。K中とk小との距離は約600mである。

児童・生徒の学力は、k小が「全国平均並み」であるのに対し、K中では「全国平均をやや下回」っており、さらに「全体としての学力水準が低い」にk小が「あまりあてはまらない」

と回答したのに対し、K中が「ややあてはまる」と回答したことからも、中学校での学力水準の低下が窺える。ただし、どちらの学校も「学力が高い者と低い者との差が大きい」に「とてもよくあてはまる」と回答していることから、K中学校区では児童・生徒間の学力の差が明確に認識されている。また、2校とも「学習習慣が身につけていない児童・生徒が多い」に「あまりあてはまらない」と回答しており、中学校区としての課題は学習習慣を身につけさせることにありそうである。

そのためか、「家庭学習の習慣を身につけさせる指導」は両校とも「やや積極的に実施」しているほか、「家庭学習のありかたに一貫性が持てるよう、小・中学校間で調整」しており、学習習慣を身につけさせる指導に力を入れている。また、一般的には小学校から中学校に進むにつれ、生徒の学習（特に家庭学習）に対する保護者の関心や協力が得にくくなっていくのであるが、K中学校区の場合には逆に、k小よりもK中で「教育熱心な保護者」や「児童・生徒の家庭学習に協力する保護者」が多いようである（どちらも、k小「あまり多くないと思う」、K中「やや多いと思う」と回答）。

K中学校区では、「中学校区で、小・中学校間の校時程の調整」を図り、年間25回の「合同研修会（主題研）、合同職員会、合同分掌部会等を実施」（自由記述）したといい、教職員間の連携が密にとられている。そのため、小中一貫教育を進めるにあたっての難しさは、全体としてあまり強くは感じていないようである。「小中一貫教育に関心がなかったり、理解がなかったりする教職員がいる」とも感じておらず（k小「ほとんど感じていない」、K中「あまり感じていない」）、「小中一貫教育に対して理解のある保護者」も「かなり多いと思う」（両校とも）という回答から、教職員・保護者が一丸となって、小中一貫教育に取り組んでいる様子が窺える。

### （3）L中学校区

L中学校区は、L中学校と1小学校からなる。L中と1小とは道路を挟んで隣接し、300mほどの距離である。しかし、1小学校には8.5km（車で約20分）ほど離れた場所に分校がある。本調査では、分校は本校に含めて1校としての回答を依頼しているが、質問によっては分校の実態も踏まえて回答がなされている部分もある。

1小が「全国平均並み」としている学力は、L中では「全国平均をやや上回る」と中学校段階で高まっているようである。「全体として学力水準が低い」に対しても1小は「あまりあてはまらない」、L中は「まったくあてはまらない」と回答しており、学力はやや高い水準にあると見られる。さらに2校とも、「学力が高い児童・生徒が多い」と「学習意欲が高い児童・生徒が多い」に「ややあてはまる」、「授業に集中できない児童・生徒が多い」と「学習習慣が身につけていない児童・生徒が多い」に「あまりあてはまらない」と回答が一致している。

このような、児童・生徒の学力水準・学習意欲の高さや学習習慣の定着などは、学校の教育や家庭学習について保護者の理解・協力が得られていることと関係がありそうである。両校とも、「学校の教育活動や行事等に協力する保護者」、「児童・生徒の家庭学習に協力する保護者」、「授業参観や学級懇談に出席する保護者」、「小中一貫教育に対して理解のある保護者」が「かなり多い」ことから、保護者・家庭での強力な学習サポートに支えられていると考えられる。

また、「小学校卒業までに習得が必要な内容を、十分に理解していない児童・生徒が多い」に2校とも「あまりあてはまらない」と回答していること、中学校進学を控えた春休み中の課題が中学校から与えられ、小学校で学習した内容を確認し定着を図る機会が設けられているとの

回答（自由記述）が両校からあったことから、小学校段階の学習内容を確実に習得させたうえで中学校へ進学させることが徹底しているようである。さらに、L中から1小の6年生へは、週1回の音楽・英会話に加え、学期に1回ずつではあるものの、国語、社会、算数、理科への乗り入れ授業が行われており、小学校から中学校への接続を意識した指導に力を入れていることが窺える。これらのことも、L中学校区の学力水準の高さを支えている要因であるだろう。

#### （4）M中学校区

M中学校区は、M中学校とm1小学校、m2小学校とからなる、「2小・1中」の組み合わせである。M中とm1小とは約240mの距離であるが、M中、m1小とm2小とは約4.8km、車で15分ほどと離れている。また、m2小は全児童数が20名に満たない、複式学級を編制する小規模校であることに留意したい。

児童・生徒の学力は、M中とm1小が「全国平均並み」であるのに対し、m2小は「全国平均をやや下回る」といい、m1小とm2小との間に学力水準の差があることが推測される。このことは、特にm2小で明確に認識されているようであり、中学校区の児童・生徒全体について尋ねた質問に対しても、M中とm1小は同じ回答が多いのに対し、m2小の回答は学力水準の低さに加え、2つの小学校間で学力水準に差があることを指摘するようなものが多い。ただ、その中でも3校が共通して感じていることは、「学力が高い者と低い者との差が大きい」（回答は「ややあてはまる」）こと、「学習意欲が高い児童・生徒が多い」や「家庭学習に積極的に取り組む児童・生徒が多い」に「あまりあてはまらない」ことである。学習意欲の低さと家庭学習への積極的な取り組みの少なさ、そして児童・生徒の間に学力の差があることが課題となっているようである。

この背景には、M中学校区が「経済的に困難を抱えている家庭の児童・生徒」を多く抱えていることが考えられる（M中「かなり多い」、m1小・m2小「やや多い」と回答）。また、そのことが関連しているのか、「教育熱心な保護者」や「児童・生徒の家庭学習に協力する保護者」<sup>(10)</sup>、「授業参観や学級懇談に出席する保護者」<sup>(11)</sup>は「あまり多くな」く、保護者の家庭学習への協力や教育への関心が得にくい状況であるようだ。

m2小が離れた場所にありながらも、小・中学校間で教員相互の授業参観や職員研修など、教職員間の連携はとれている。特に、小中合同の「習得内容研究部会」で「基礎的・基本的な内容の習得」（自由記述）についての研究を行っていたり、「小中一貫系統一覧を作成し、学習習慣の定着を図っている」（同）など、小中一貫教育の仕組みを活かして児童・生徒の基礎学力の定着に力を入れている。

## V おわりに

本稿では、えびの市の連携型小中一貫教育実践における学力向上の取り組みについて、市内全小・中学校を対象とした質問紙調査の結果から、小・中学校の校種別および中学校区別に現状の把握を試みた。その結果明らかになったことは、以下の2点である。

1つめは、同市の小・中学校では、中学校区ごとに行われる合同研修をはじめとした、児童・生徒の学習に関する教員どうしの連携が進んでいることである。市内教職員が作成に携わった「手引き」も充実しており、小中一貫教育実践が着実に積み上げられてきている。一方で、小中

一貫教育の仕組みを活かして教育活動に取り組む中で、指導観や子ども観、学習の進め方や評価の考え方など、小学校と中学校との間に相違があることや、そうした相違を理解することが難しいと感じている様子も窺えた。

2つめは、小・中学校全体として、学力水準の低さや児童・生徒間に学力の差があることを認識しており、小中一貫教育の仕組みを活かして学力の向上を図ろうとしていることである。中学校区単位で学習状況や学力テストの結果を分析したり、学習の決まりや家庭学習のあり方などに一貫性を持たせたりするといった取り組みに力を入れていることが見て取れた。

これらのことから、「小・中学校の教員どうしの連携を図ること」と「中学校区としての課題に教職員が積極的に取り組むこと」とが、互いに補強し合いながら小中一貫教育が展開しているということがいえる。当然のことのように見えるが、異校種の教員がさまざまな違いを乗り越えて連携を図ることは、簡単なことではない。「中学校区として」解決すべき課題を掲げ、それに向かって小学校教員と中学校教員とが協力して取り組んでいくことにより、教員どうしの連携も強まり、課題の解決にもつながるのである。

以上の知見を踏まえ、児童・生徒の学力向上を目指して小中一貫教育をいっそう充実させるための課題として、以下に2点挙げることにする。1点目は、小中一貫教育の効果検証を行うとともに、推進の必要性を再度確認することである。えびの市における連携型小中一貫教育の体制は、すでに整っているといえる。しかしそれに満足して、小中一貫教育を進める理由を理解していなかったり効果を実感できていなかったりすると、教員の少なからぬ負担や小さな認識のずれから小中一貫教育が崩壊しかねない。あらためて小中一貫教育に取り組む必要性を確認し、中学校区として何を解決するためにどのように小中一貫教育を進めていくのか、引き続き議論を重ねていくことが望まれる。

2点目は、児童・生徒の学習に関して家庭と連携を図ることである。各学校では家庭学習の指導に力を入れているほか、小中一貫教育の取り組みの一環として、中学校区単位で統一や系統性を図った家庭学習の手引きを作成し各家庭に配付している。しかし、必ずしもそれらの成果は現れておらず、児童・生徒の学力水準の低さや学習習慣の未定着が課題となっている学校が少なくない。そのような学校では、家庭学習に協力する保護者が少ない傾向が窺える。そこで、各家庭と連携を深め、児童・生徒の家庭学習にサポートを得られるよう工夫が求められる。

ところで、同様に連携型小中一貫教育を全市で進めている小林市は、えびの市と隣接した自治体であり、小中一貫教育の全市導入も同じ時期であった。しかし、たとえばえびの市ではすべての学校で「小・中学校合同で、系統性・一貫性の視点からカリキュラムを検討すること」を実施しているのに対し、小林市では約半数しか実施していなかったり<sup>(12)</sup>、小林市に比べえびの市の学校のほうが「小・中学校の教員が持つ、それぞれの指導観や子ども観を理解するのに時間がかかること」に困難を感じている割合が高かったりする<sup>(13)</sup>など、小中一貫教育の取り組みの内容や力の入れ方、困難に感じる点やその程度などが異なっている様子が窺えた。両市の比較検討は今後の課題としたい。



## 注

- (1) 「えびの市一貫教育推進基本計画～一貫教育の更なる充実を目指して～」 えびの市教育委員会 2010（平成22）年12月 p.3.
- (2) 同上 p.2.
- (3) 同上 p.11.
- (4) 遠藤宏美・助川晃洋 「宮崎県小林市の連携型小中一貫教育実践における学力向上の取り組み－質問紙調査による全体状況の把握－」 『宮崎大学教育文化学部紀要（教育科学）』第28号 宮崎大学教育文化学部 2013（平成25）年3月 pp.19-60.
- (5) (1)と同じ p.2.
- (6) 「広報えびの」2011（平成23）年3月号 えびの市役所 p.6.
- (7) 「少人数指導・少人数学習」については、1クラスあたり6名（複式学級を含む）から20名程度と、もともとの児童・生徒数が少ない学校・学級があるため、厳密には「学力向上を目指した取り組み」といえない場合もある。
- (8) 「えびの市一貫教育 推進の手引き」 えびの市教育委員会 2010（平成22）年3月 「はじめに」（ページ番号なし）
- (9) 学校名を示すアルファベットは、小林市調査でAからIまで（小学校は対応する小文字のアルファベット）を用いた（遠藤・助川 前掲論文）。本稿ではそれとの混同を避けるため、Jから順に振ることとした。
- (10) 「児童・生徒の家庭学習に協力する保護者」について、M中は無回答。
- (11) 「授業参観や学級懇談に出席する保護者」について、m2小はM中・m1小と異なり「やや多いと思う」と回答。
- (12) (4)と同じ p.29.
- (13) 同上 p.30.

資料1 調査票および単純集計結果（校種別）

**小中一貫教育実践校における学力向上の取り組みに関する調査**

この調査は、小中一貫教育を実践している小・中学校ならびに中学校区単位で、児童・生徒の学力向上を目指してどのような取り組みを行っているかを明らかにするために、えびの市教育委員会のご理解・ご協力を得て、宮崎大学小中一貫教育支援研究プロジェクトが実施するものです。調査はえびの市の市立小学校および市立中学校のすべてを対象としております。校務でご多忙のところにご面倒をおかけすることとなり大変恐縮ですが、調査の趣旨をご理解の上、ご協力をいただければ幸いです。

<お答えいただく上での注意>

1. 質問には、校長先生、教頭先生、教務主任の先生など、学校の運営や小中一貫教育に深く携わっておられる先生がご回答ください。先生方の中で相談してご記入いただいてもかまいません。なお、ご回答くださる先生のお名前をご記入いただく必要はありませんが、後日、回答についての確認や連絡をとる必要が生じたときのために、お立場（役職名）のみお知らせください。
2. 一部、昨年度までの指導実施状況や卒業生を想定してお答えいただく質問がありますが、基本的には今年度（平成 24 年度）の児童・生徒の状況や学校の方針等についてご回答ください。また、回答にあたって、中学校区で相談する時間をとったり、回答を統一したりする必要はございません。質問によっては、意見や考えをうかがうものもありますが、記入される方の主観的な判断でお答えくださって結構です。
3. ご記入いただいた調査票は、同封の返信用レターバックに入れ**3月12日（火）**までにご返送をお願いいたします。その際、学校要覧や学校経営案など、貴校の概要や教育実践について記した資料、貴校の記録等で頂戴できるものがありましたら、同封していただけますと幸いです。なお、パソコンを利用して全部あるいは一部を記入していただくことも可能です。その場合、お手数ですが、下記の担当者までメールでお知らせください。
4. 調査の結果は、学会や小中一貫教育フォーラムで発表する際に報告したり、論文や報告書等に掲載したりすることを予定しておりますが、研究以外に用いることは決してありません。調査の実施・公表にあたっては、どの学校がどのような回答をしたのか特定できないよう配慮し、情報の保護に万全の注意を払います。この調査に回答していただくことによって、貴校や先生方にご迷惑をおかけすることはありませんので、ご安心ください。
5. 本調査についてのお問い合わせは、下記の担当者までお願いいたします。

助川 晃洋（宮崎大学教育文化学部 准教授）

TEL/FAX ●●●●●●●●●● E-mail : ●●●●●●●●@cc.miyazaki-u.ac.jp

<学校名と、貴校が属する中学校区をご記入ください>

貴校の名称	小学校	5校	貴校が属する中学校区
	中学校	4校	

<調査票にご記入くださる先生の役職名をお答えください> N=9

- |             |            |        |            |         |            |
|-------------|------------|--------|------------|---------|------------|
| 1. 校長       | 11.1% (1校) | 2. 教頭  | 22.2% (2校) | 3. 教務主任 | 66.6% (6校) |
| 4. 小中一貫教育担当 | 0.0%       | 5. その他 | 0.0%       |         |            |



## ◆ 以下、特に表記がない場合は、小学校：N=5、中学校：N=4

Q 1. 貴校に在籍する児童・生徒についてお尋ねします。貴校の児童・生徒の学力の状況は、全体として見るとどのような状態にありますか。次の選択肢の中から、おおむね最も近いと考えられるものをひとつ選び、番号に○をつけてください。

- |                 |              |              |
|-----------------|--------------|--------------|
| 1. 全国平均を、大幅に上回る | 小：0.0%       | 中：0.0%       |
| 2. 全国平均を、やや上回る  | 小：0.0%       | 中：25.0% (1校) |
| 3. 全国平均並み       | 小：60.0% (3校) | 中：25.0% (1校) |
| 4. 全国平均を、やや下回る  | 小：20.0% (1校) | 中：50.0% (2校) |
| 5. 全国平均を、大幅に下回る | 小：0.0%       | 中：0.0%       |
| N.A.            | 小：20.0% (1校) | 中：0.0%       |

Q 2. 貴校が属する中学校区の児童・生徒全体の状況についてお尋ねします。中学校区の児童・生徒の学習・学力はどのような実態ですか。以下にあげる事項について、中学校区の児童・生徒にあてはまるものをひとつずつ選び、その番号に○をつけてください。

	とてもよくあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	わからない
A. 学力が高い児童・生徒が多い	小：0.0 中：0.0	60.0 25.0	20.0 75.0	20.0 0.0	0.0 0.0
B. 学力が低い児童・生徒が多い	小：20.0 中：0.0	80.0 75.0	0.0 25.0	0.0 0.0	0.0 0.0
C. 学力が高い者と学力が低い者との差が大きい	小：60.0 中：75.0	40.0 25.0	0.0 0.0	0.0 0.0	0.0 0.0
D. 全体として学力水準が低い	小：20.0 中：0.0	20.0 50.0	60.0 25.0	0.0 25.0	0.0 0.0
E. 授業に集中できない児童・生徒が多い	小：0.0 中：0.0	40.0 50.0	40.0 50.0	20.0 0.0	0.0 0.0
F. 学習意欲が高い児童・生徒が多い	小：0.0 中：0.0	60.0 25.0	40.0 75.0	0.0 0.0	0.0 0.0
G. 学習習慣が身につけていない児童・生徒が多い	小：0.0 中：0.0	20.0 50.0	80.0 50.0	0.0 0.0	0.0 0.0
H. 家庭学習に積極的に取り組む児童・生徒が多い	小：0.0 中：25.0	60.0 25.0	40.0 50.0	0.0 0.0	0.0 0.0
I. 小学校卒業までに習得が必要な学習内容を、十分に理解していない児童・生徒が多い	小：0.0 中：0.0	40.0 50.0	60.0 50.0	0.0 0.0	0.0 0.0
J. 学力不足のために、希望する高校への進学が難しい生徒が多い（ <u>中学校区</u> の生徒についてお答えください）	小：0.0 中：0.0	20.0 0.0	0.0 75.0	20.0 25.0	60.0 0.0
K. 中学校区内の複数の小学校間で、学力水準に差がある（中学校区に属する小学校が1校のみの場合、回答不要） ※ 小：N=3、中：N=1	小：0.0 中：0.0	33.3 0.0	33.3 100.0	33.3 0.0	0.0 0.0

Q3. 貴校が教育活動を行う上で重点を置いていることには、どのようなことがありますか。次のうち、学校として特に重点を置いていることを3つまで選び、番号に○をつけてください。(複数回答)

	小(N=4)	中(N=4)
1. すべての児童・生徒に、基礎学力を身につけさせること	50.0	75.0
2. 学校全体としての学力水準を上げること	75.0	25.0
3. 学習習慣を身につけさせ、主体的に学習に取り組む児童・生徒を育むこと	25.0	25.0
4. 基本的な生活習慣を身につけさせること	75.0	75.0
5. 自分に自信や誇りを持てる児童・生徒を育成すること	25.0	25.0
6. 児童・生徒が望ましい人間関係を築くことができるようすること	0.0	0.0
7. 郷土を愛し、地域に誇りが持てる児童・生徒を育むこと	50.0	50.0
8. すべての児童・生徒に、体力テストで一定水準の体力をつけさせること	0.0	0.0
9. 正しい食習慣を確立させ、健全な身体を育むこと	0.0	0.0
10. 生徒指導上の問題がない、落ち着いた学校生活を送らせること	0.0	25.0

Q4. 貴校において、「知育」、「徳育」、「体育」のうち、最も課題としていることはどれですか。いずれかひとつの番号に○をつけてください。

	小	中
1. 知育	100.0	75.0
2. 徳育	0.0	25.0
3. 体育(食育を含む)	0.0	0.0

Q5. 貴校では、子どもの学力向上に向けて次のような取り組みをどれくらい積極的に実施していますか。それぞれについてあてはまる番号ひとつずつに、○をつけてください。

	小(N=5)	中(N=4)	実施している とても積極的 に	実施している やや積極的 に	あまり 実施していない	実施していない
A. 放課後や休み時間等の補習指導	小: 20.0 中: 50.0		20.0 25.0	60.0 25.0	0.0 0.0	
B. 長期休業中の補習指導	小: 0.0 中: 50.0		0.0 0.0	60.0 50.0	40.0 0.0	
C. 習熟度別指導	小: 40.0 中: 75.0		60.0 25.0	0.0 0.0	0.0 0.0	
D. 少人数指導・少人数学習	小: 80.0 中: 75.0		20.0 25.0	0.0 0.0	0.0 0.0	
E. 学力が高い児童・生徒に対して、発展的な学習の機会を用意すること	小: 20.0 中: 0.0		80.0 100.0	0.0 0.0	0.0 0.0	
F. 自校の教員を活用したTTによる授業	小: 20.0 中: 0.0		60.0 75.0	20.0 0.0	0.0 25.0	
G. ICTを活用した授業を行うこと	小: 0.0 中: 0.0		40.0 50.0	40.0 50.0	20.0 0.0	
H. 家庭学習の習慣を身につけさせる指導	小: 20.0 中: 25.0		80.0 75.0	0.0 0.0	0.0 0.0	

ほかに、貴校が学力向上を目指して行っている取り組みがありましたら、具体的にお教えてください。

※ 省略(資料3参照)

**小学校にお尋ねします。** (中学校は4ページのQ9にお進みください。) (N=5)

◆ このページのQ6～Q8につきましては、実施計画などの関連資料を添付することにより、回答に代えていただくことも可能です。

Q6. 今年度、貴校では教科担任制を取り入れている学年・教科等がありますか。下の表のうち、教科担任制を取り入れている学年および教科等のマスに○をご記入ください。

	国語	社会	算数	理科	音楽	図画工作	家庭	体育	外国語活動
1年生	0.0		0.0		0.0	0.0		0.0	
2年生	0.0		0.0		0.0	0.0		0.0	
3年生	0.0	0.0	0.0	60.0	20.0	0.0		0.0	
4年生	0.0	0.0	0.0	60.0	20.0	0.0		0.0	
5年生	0.0	20.0	0.0	60.0	60.0	0.0	20.0	20.0	0.0
6年生	0.0	0.0	0.0	60.0	60.0	0.0	40.0	0.0	20.0

Q7. 貴校では、習熟度別授業を取り入れていますか。あてはまるほうの番号に○をつけてください。

1. 取り入れている 80.0 →下のSQ7にお答えください。
2. 取り入っていない 20.0 →Q8へお進みください。

SQ7. 上の質問で「1. 取り入れている」と回答した小学校にお尋ねします。下の表のうち、習熟度別授業を取り入れている学年および教科のマスに○をご記入ください。(N=4)

	国語	社会	算数	理科	その他の教科
1年生	0.0		0.0		0.0
2年生	0.0		0.0		0.0
3年生	0.0	0.0	50.0	0.0	0.0
4年生	0.0	0.0	75.0	0.0	0.0
5年生	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0
6年生	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0

Q8. 今年度、通常の授業において、貴校の教員が中学生に対して授業を行う機会（単独かTTかを問いません）はありますか（ありました）か。あてはまるほうの番号に○をつけてください。

1. ある（あった） 0.0 →下のSQ8にお答えください。
2. ない（なかった） 100.0 →5ページのQ11へお進みください。

SQ8. 上の質問で「1. ある（あった）」と回答した小学校にお尋ねします。下の表のうち、貴校の教員が中学生に対して授業を行う教科と学年および頻度をお教えください（頻度は、実施している学年・教科のマスに、「週1時間」「学期に1回」などご記入ください）。

	国語	社会	数学	理科	英語	その他の教科
中学1年生						
中学2年生						
中学3年生						

**中学校にお尋ねします。** (小学校は、5ページのQ11にお進みください。) (N=4)

◆ このページのQ9～Q10につきましては、実施計画などの関連資料を添付することにより、回答に代えていただくことも可能です。

Q9. 貴校では、習熟度別授業を取り入れていますか。あてはまるほうの番号に○をつけてください。

1. 取り入れている 100.0 →下のSQ9にお答えください。
2. 取り入っていない 0.0 →Q10へお進みください。

SQ9. 上の質問で「1. 取り入れている」と回答した中学校にお尋ねします。下の表のうち、習熟度別授業を取り入れている学年および教科のマスに○をご記入ください。 (N=4)

	国語	社会	数学	理科	英語	その他の教科
中学1年生	0.0	0.0	50.0	0.0	100.0	0.0
中学2年生	0.0	0.0	75.0	0.0	100.0	0.0
中学3年生	0.0	0.0	50.0	0.0	100.0	0.0

Q10. 今年度、通常の授業において、貴校の教員が小学生に対して授業を行う機会（単独かT Tかを問いません）はありますか（ありました）か。あてはまるほうの番号に○をつけてください。

1. ある（あった） 75.0 →下のSQ10にお答えください。
2. ない（なかった） 25.0 →5ページのQ11へお進みください。

SQ10. 上の質問で「1. ある」と回答した中学校にお尋ねします。下の表のうち、貴校の教員が小学生に対して授業を行う教科等と学年および頻度をお教えてください（頻度は、実施している学年・教科等のマスに、「週1時間」「学期に1回」などをご記入ください。）。 (N=3、頻度略)

	国語	社会	算数	理科	その他の教科等
1年生		/		/	33.3 (英会話)
2年生		/		/	33.3 (英会話)
3年生					
4年生					
5年生					100.0 (音楽、英会話、英語表現)
6年生	33.3	33.3	33.3	66.6	100.0 (音楽、英会話、英語表現)

すべての小学校・中学校にお尋ねします。

Q11. 貴校および中学校区では、児童・生徒の学習支援や学力向上に向けて、小・中学校が連携して次のようなことを実施していますか。**実施しているものすべての番号に○をつけてください。**

	小 (N=5)	中 (N=4)
1. 小・中学校間で教員が相互に授業を参観すること	100.0	100.0
2. 他校種（小学校⇔中学校）の教員がTTとして、授業に入ること	80.0	75.0
3. 他校種（小学校⇔中学校）の教員が単独で、授業を行うこと	100.0	75.0
4. 通常の授業以外（サマースクールなど）で他校種（小学校⇔中学校）の教員が授業を行うこと（TT、単独を問わず）	40.0	50.0
5. 中学校区で児童・生徒の学習指導・教科指導について、合同で研修を行うこと	100.0	100.0
6. 中学校区の教員が合同で、児童・生徒の学力についての分析を行うこと	100.0	100.0
7. 学力面で気になる児童・生徒を特定して、小・中学校合同で支援に当たること	20.0	25.0
8. 小・中学校合同で、系統性・一貫性の視点からカリキュラムを検討すること	100.0	100.0
9. 小・中学校合同で、評価規準や方法について一貫性の視点から検討すること	40.0	25.0
10. 中学校区で、小・中学校間の校時程の調整を図ること	20.0	25.0
11. 授業時の態度や学習の決まりについて、中学校区で統一したり系統性を図ったりすること	80.0	100.0
12. 校則や学校生活の決まりについて、中学校区で統一したり系統性を図ったりすること	60.0	75.0
13. 家庭学習のあり方に一貫性が持てるよう、小・中学校間で調整すること	80.0	75.0
14. 中学校区で共通の「家庭学習の手引き」を作成するなどして、家庭学習の指導を統一したり系統性を図ったりすること	100.0	75.0
15. 学習や生活に関する家庭向けの通信（おたより）を、中学校区として発行すること	40.0	25.0

※ 次の16～18は、**小学校のみお答えください。** (N=5)

16. 中学校区の小学校どうして交流学習を行うこと（小・小連携）(N=3)	100.0	-
17. 中学校進学前の児童に、中学校の学習に必要な基礎的・基本的な事項を確認させること	80.0	-
18. 卒業させた児童について、中学校と連絡を取り合って学習をサポートすること	20.0	-

※ 次の19～22は、**中学校のみお答えください。** (N=4)

19. 中学校進学前に学力面で身につけておいてほしいことを、小学校へ伝えること	-	75.0
20. 学力面で気になる生徒について、生徒の出身小学校と連絡を取り合うこと	-	50.0
21. 小学校の保護者に対し、中学校での学習や生活について中学校の教員が説明をすること	-	75.0
22. 長期休業中などに、中学生が小学生の学習をサポートする活動を行うこと	-	0.0

上記の回答への補足や、そのほかに貴校および中学校区が連携して学力向上を目指している取り組みがありましたら、具体的にお教えてください。

※ 省略（資料3参照）

Q12. 貴校および中学校区では、小学校から中学校への「進学」に際し、学習状況や学力実態に関してどのような引き継ぎを行っていますか。その内容や様式について、具体的にお教えてください。

※ 省略（資料3参照）

- Q13. 中学校区の児童・生徒の学習や学力について、小・中学校の教職員の間では日常的にどのような機会に、どのような情報交換がなされていますか。情報交換の機会やその頻度、情報の内容などについて、具体的にお教えてください。

※ 省略（資料3参照）

- Q14. 貴校では、新学習指導要領を踏まえて「確かな学力」を育成するために、小中一貫教育を通してどのような取り組みを行っていますか。貴校での取り組みについて、以下に具体的にご記入ください。

＜基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させるために＞

例) 中学校入学後に、小学校で学習した内容を復習する機会を設けている。

※ 省略（資料3参照）

＜思考力・判断力・表現力等を育成するために＞

例) 9年間のスパンで論述やレポートに力を入れた指導をしている。

※ 省略（資料3参照）

＜学習意欲を向上させるために＞

例) 小学校において、中学校で学習する内容を先取りした授業を行い、学習への意欲を高めている。

※ 省略（資料3参照）

＜学習習慣を身につけさせるために＞

例) 望ましい家庭学習の時間や内容について、9年間分の表を作り、家庭に配付している。

※ 省略（資料3参照）

Q15. 貴校では、小中一貫教育の仕組みを活かして学力向上に取り組む際、次のようなことをどれくらい感じていますか。それぞれについて、あてはまる番号に○をつけてください。

	かなり 感じている	少し 感じている	あまり 感じていない	ほとんど 感じていない
A. 小・中学校間で、連絡を取り合ったり情報を共有したりする機会が少ないこと	小： 0.0 中： 0.0	40.0 25.0	40.0 75.0	20.0 0.0
B. 小学校と中学校との距離が離れていて、行き来にかかること	小： 0.0 中： 0.0	20.0 50.0	40.0 25.0	40.0 25.0
C. 小・中学校の教員が集まって話し合う時間が確保しにくいこと	小： 20.0 中： 0.0	20.0 0.0	20.0 100.0	40.0 0.0
D. 他校種の授業を参観したり、乗り入れ授業を行ったりするための時間が確保できないこと	小： 20.0 中： 0.0	20.0 50.0	20.0 25.0	40.0 25.0
E. 他校種（小学校⇔中学校）への乗り入れ授業をすることができる教員の人数が不足していること	小： 40.0 中： 25.0	0.0 50.0	40.0 0.0	20.0 25.0
F. 他校種（小学校⇔中学校）への乗り入れ授業を行うための、教員の知識・技術や専門性が不足していること	小： 20.0 中： 0.0	0.0 25.0	60.0 25.0	20.0 50.0
G. 他校種（小学校⇔中学校）の児童・生徒理解が難しいこと	小： 0.0 中： 0.0	20.0 25.0	60.0 50.0	20.0 25.0
H. 小・中学校間で、指導方法や学習の進め方などが異なること	小： 0.0 中： 25.0	60.0 25.0	40.0 50.0	0.0 0.0
I. 小・中学校間で、評価の考え方や方法が異なること	小： 0.0 中： 0.0	60.0 50.0	40.0 50.0	0.0 0.0
J. 小・中学校の教員が持つ、それぞれの指導観や子ども観を理解するのに時間がかかること	小： 0.0 中： 0.0	80.0 75.0	20.0 25.0	0.0 0.0
K. 異動があるため、児童・生徒を長期にわたって指導することができないこと	小： 0.0 中： 0.0	40.0 25.0	60.0 75.0	0.0 0.0
L. 小中一貫教育に関心がなかったり、理解がなかったりする教職員がいること	小： 0.0 中： 25.0	60.0 0.0	0.0 50.0	40.0 25.0

その他、貴校および貴校が属する中学校区において、小中一貫教育を行う上で困難に感じることや課題がありましたら、ご記入ください。また、それを解決するために貴校や中学校区でとっている手段や工夫がありましたら、併せてご記入ください。

※ 省略（資料3参照）



Q16. 貴校の児童・生徒の状況についてお尋ねします。貴校には次のような児童・生徒はどれくらいいますか。それぞれについて、あてはまる番号に○をつけてください。

	かなり多い	やや多い	あまり多くない	ほとんどいない
A. 当該学年の学習についていけない児童・生徒	小：0.0 中：0.0	40.0 50.0	60.0 50.0	0.0 0.0
B. 授業中落ち着きのない児童・生徒	小：0.0 中：0.0	20.0 25.0	80.0 50.0	0.0 25.0
C. 不登校の児童・生徒	小：0.0 中：0.0	0.0 0.0	0.0 25.0	100.0 75.0
D. 経済的に困難を抱えている家庭の児童・生徒	小：0.0 中：25.0	60.0 25.0	20.0 50.0	20.0 0.0
* 次のE・Fは、小学校のみお答えください (N=5)				
E. 中学校進学時に、学習に対する不安が見られる児童	小：0.0 中：-	0.0 -	100.0 -	0.0 -
F. 国・私立中学校を受験する児童	小：0.0 中：-	0.0 -	60.0 -	40.0 -
* 次のG・Hは、中学校のみお答えください (N=4)				
G. 小学校までの学習内容を習得していない生徒	小：- 中：0.0	- 50.0	- 50.0	- 0.0
H. 学力不足により、希望する進路に進めない生徒	小：- 中：0.0	- 0.0	- 50.0	- 50.0

Q17. 貴校の児童・生徒の保護者や地域の状況についてお尋ねします。貴校には次のような保護者や地域住民はどれくらいいると思われますか。それぞれについて、あてはまる番号に○をつけてください。

	かなり多いと思う	やや多いと思う	あまり多くないと思う	ほとんどいないと思う
A. 教育熱心な保護者	小：0.0 中：25.0	40.0 25.0	60.0 50.0	0.0 0.0
B. 学校の教育活動や行事等に協力する保護者	小：80.0 中：50.0	0.0 50.0	20.0 0.0	0.0 0.0
C. 児童・生徒の家庭学習に協力する保護者	小：20.0 中：25.0	0.0 25.0	80.0 25.0	0.0 0.0
D. 授業参観や学級懇談に出席する保護者	小：20.0 中：50.0	60.0 0.0	20.0 50.0	0.0 0.0
E. 小中一貫教育に対して理解のある保護者	小：60.0 中：50.0	20.0 25.0	20.0 25.0	0.0 0.0
F. 学校の教育活動や行事等に協力する地域住民	小：20.0 中：0.0	60.0 75.0	20.0 25.0	0.0 0.0
G. 学校公開（オープンスクール）に参加する地域住民	小：20.0 中：0.0	40.0 25.0	40.0 75.0	0.0 0.0
H. 小中一貫教育に対して理解のある地域住民	小：60.0 中：25.0	20.0 50.0	20.0 25.0	0.0 0.0

N. A  
-  
25.0

質問は以上です。ご協力ありがとうございました。















